
伝説の剣士じゃない！ ～ドラゴンの鱗（うろこ）～

後藤詩門

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

伝説の剣士じゃない！ ～ドラゴンの鱗（カス）～

【コード】

N9386F

【作者名】

後藤詩門

【あらすじ】

音信不通となった村タワリッシに赴いたメアリーたち冒険者パーティィー。そこで見たものは……

枯れ草を踏みしめ国境沿いの山間部にある道を、苦しそうに息を切らせて歩く人影があった。

数は五つ。

恐らく目的地は人口50人ほどの小さな村、タワリツシと思われる。というのもこの道が行き着く先はその村しかないからだ。

この先にあるのは翼ある者の他は決して越えられぬ、標高8000メートルのトニック山があるのみ。

人間では不可能な道程である。引き返すしかないしかない道なのだ。

だから……彼らの目的地はもちろんタワリツシの村だと分かる。

だが、その目的は謎であった。

一見したところ彼らは村人ではないようである。

では、商人だろうか？

いや、それも見えない。この国でよく見かける隊商キャラバンにしては少ない人数。

そもそもこんな田舎に少人数とはいえキャラバンが来るはずもない。

来たとしてもせいぜい一人か二人の行商人。

多人数を割いてタワリツシにやって来たところで、旅費を稼ぐ事さえ難しいだろう。

この村の者達は自給自足の生活を営んでいるのだから……

誰に頼らずとも自分たちは生きていける。たとえ相手がこの国の王様であったとしても頼りはしない……彼らは固くそう決意していた。

だからこそ、ここはこの国唯一の自治権を有する村落なのだ。
昔から国王はこの地を領土に組み込んではいるが領主も置かず村人の自治を認めている。

租税すらない。まさに隔離された世界。

タワリツシの村人たちが、たまにくる商人たちから購入するのは……せいぜい珍しい植物の種や外国産の酒くらい。
もしくは憧れる村の女達へのプレゼント程度だ。

例えば、綺麗な石をはめ込んだ指輪や珊瑚でできたネックレスといった類たぐいのもの。

それもごく値段の安いものばかり。
たいした儲けにはならない。

だからあの5人の旅人も商人とは思えなかった。そして、当然ながらというべきか……彼らは商人ではない。

では、一体何者なのか？

普通に考えれば観光客という答えがもっとも妥当であろう。

この辺鄙へんびなタワリツシの村にも観光客ならよく来るからだ。

何と言ってもここは自然豊かな場所。

近くに国内随一の透明度を誇るリキユール湖もあるし、その向こうには先ほども述べた万年雪の絶景を誇る霊峰トニック山もある。

この二つの名所に近い事もあって、毎年千人ほどの観光客がやって来ていた。

だが……

それも晩春から初秋にかけての事。

今の季節。つまり冬の足音が聞こえてくるような晩秋に、この村に押しかけてくるような観光客はまずいない。

まもなくこの地は身動きできないほどの雪に閉ざされるのだから。標高の高い場所に住む村人たちの宿命。

だから、この時期のタワリツシには村人以外誰も近寄ろうとはし

ない。

たかが観光で命の危険を冒す者など、よほどの馬鹿が変わり者である。

そして、またしても当然ながら……彼らは観光客ではないのだ。

では、一体彼らは何者か？

答えは一行の姿を見れば一目瞭然である。

あんなに重装備を施した行商人や観光客はいない。

しかも統一された武器や鎧ではないことから、どこかの国の軍隊というわけでもなさそうだ。

彼らは重装備ではあるが、それぞれが思い思いの武具を身に纏まとっている。

その姿は紛れもなく一つの職業を暗示していた。

彼らはそう、冒険者なのだ！

2 .

「ねえ、パル。タワリツシの村はまだなの？」

急勾配の上り坂、五人の先頭を歩く者がまず声を発した。まだ若い女の声だ。

その声は少し息切れしているがまだ余裕も感じさせる。

彼女の身なりは戦士のそれ。女性騎士が愛用する比較的露出の多い鎧を纏い、腰には二本の細身の剣レイピアを吊している。

若い女……と言ったがその顔はまだまだ幼さを残していた。はつきり言って子供に見えた。

名前はブラッディー・メアリー、16歳。名実共に少女である。

しかし少女と言ったが……彼女は国中に名の知られた剣士でもある。

二本のレイピアを巧みに操り敵を圧倒する二刀流の女戦士。すでに王に仕える正規の騎士団を含めても、国内で五本の指に入る剣の使い手としての評判を得ていた。

可愛らしい円つぶらな瞳を持つあの可憐な少女がと、信じられない男も多い。

そんな国中に勇名轟かせるメアリーが声をかけたのは、彼女のすぐ後ろを歩いていた中年男。

パルと呼ばれたその男は、鎖帷子くさりかたびらに身を包み短剣と小さな槍を抱えていた。

名はオールド・パル。職業は盗賊。もつとも、その腕前を仲間に見せた事は一度もない。

「はあ、はあ、はあ……あ、あと、一里も歩けばタワリッシですぞ、お嬢。も、もう少し頑張ってくださいね！」

慣れない重装備に加え急な山道。息も絶え絶えになっていたが、律儀にも励ましの言葉をメアリーにかける。

だが実際のところ、この五人の中で一番バテているのは彼かもしれない。

人は誰しも年には勝てない。しかもパルは盗賊とは思えない丸型体型である。さつきから息切れが止まることなく続く。

すると、そんなパルを慮おもつてか別の一人が話しかけてきた。

「パル殿、あなたの方こそ頑張ってくださいよ。僕が学んだ魔専院では、人相学も教えてましたが……今のパル殿の顔、死期の迫った人間の人相にそっくりですよ」

そう言つと、若い男は高らかに笑い始めた。どうやら中年男を心配しての発言というよりは、ただからかっていただけのようでもある。

彼の名は、ハーヴェイ・ウォールバンガー。真つ黒なフード付きのマントを着込み長い櫛の木の杖を持つこの男の身なりは、この国の者なら一目で分かる。

彼は……そう、黒魔法（攻撃魔法）の使い手なのだ。

しかも、なんとこの世界屈指の黒魔法使い養成所である王立魔法技術高等専門学院（通称、魔専院）を卒業したエリートでもある。

「はあ、はあ、はあ……う、うるさいぞハーヴェイ・ウォールバンガー！ この酔っ払いめ」

からかわれた事に気づいたパルが、いまいましそうに呟く。よく見ればハーヴェイの顔は朱色に染まっていた。

パルの言う通り酔っているのだ。この黒魔法使いは無類の酒好きであった。

「いやあねえ、アル中は。まともに魔法を使えた事もないんだから！ それに引きかえ、あたしはお役に立ってますわよね、メアリー様？」

三人の会話に割り込んできたのは、メアリーよりは少し年上の若い女性であった。

先の黒魔法使いの男と違い、真つ白なロープを着込み弓と矢を携えている。

美しく整った顔立ち。もっと髪を伸ばして女らしい格好をすればまだ良くなるのにと、ある者は感じるかもしれない。

だが、彼女のその短いショートヘアこそが彼女の身分を証しす

るものなのだ。

つまり彼女は……この国で最も信仰されている神、プロテゼマスに仕える神官なのである。

そして、神殿でも屈指の白魔法（防御魔法）使いとしてもその名が知られる。

シャーリー・テンプル、それが彼女の名前。

「シャーリー、それ以上近寄れば容赦なく突くわよ！」

駆け寄ろうとする女神官に、音もなくレイピアを引き抜いたメアリーがすくむ。

いつの間に……

シャーリーはゴクリと生唾を呑み込んだ。

その切っ先は確実にシャーリーの喉元にある。

凄い！ 彼女はまた腕を上げているようだ。となりで見ていた彼女のお目付役のようなパルも舌を巻く。

「や、やあねえ、メアリー様。まだあの事根に持っているの？」

震える声でシャーリーが呟く。

あの事とは……つい先日シャーリーがメアリーにちょっとした悪戯をした事を指す。と、これはシャーリーの言い分。

「村の娘を拐かして監禁し、あまつさえ私にあんな変態行為をしたの……ただの悪戯ですって？ ふざけた事言ってるんじゃないわよー！」

実際、メアリーはもう少しで処女を失うところだった。あの時、助けが入らなければ……

今でも彼女は夢でうなされるほどなのである。

そう、シャーリーはメアリーを付け狙うレズビアン。
目的のためには手段を選ばず、いや手段のためには目的すら選ばない、とんでも女神官なのだ。

シャーリーは彼女のあまりの剣幕にすごすごと引き下がるしかなかった。

しばらくは大人しくしておこうと決めたよう。

そんな変態女のしよぼくれた姿を見て、メアリーは大きなため息を一つ吐く。

反省したように見えても騙されてはいけない。あの女は悪魔なのだ。

メアリーは心の中で自戒すると、今度は声に出してはつきりとなり辛辣なセリフをはいた。

「今度、私に指一本でも触れたらシャーリー……あなたをパーティーから外すからね！」

その一言に、女神官は落とした肩をビクツとさせる。目には涙が浮かぶ。酷い！シャーリーは下唇を噛んだ。そして振り向きざまこう言ったのだ。

「ち、ちよつとメアリー様、あたしとっても心外だわ！何でそんなつれない事言うのよ。あたしの魔法はハーヴェイより役に立ってるでしょ！それともあのアル中よりもあたしは役立たずだとも？」

「誰が魔法の技量について言ってるのよ？私が問題にしているのはセクハラのことよ！それに……あんだ達の魔法って、大して役に立ってないじゃない」

痛い所をつかれたとシャーリーは口ごもる。ついでに酔っ払いの黒魔法使いも居心地悪そうにそっぽを向いた。

やれやれである。だが、その時だ。

それまで沈黙を守り通していた五番目の人物が、ようやくその重い口を開いたのである。

人物と言ったが正確には違う。なぜなら彼は……人間ではなかったからだ！

3 .

「いや、今回こそは役に立ちそうだぞメアリー」

「えっ？」

メアリーは声の主をかえりみた。そこにいるのは、国内随一の影響力を持つ大貴族カシス家の三男坊、ベルモット・カシス。

かつては国中の乙女を魅了したという色男だ。

だが今では悪い魔女の呪いのせいでゴブリンの姿へ変えられている悲劇的な伝説の剣士。

まるで獣みたいなその醜い姿に以前メアリーは嫌悪感を覚えたものだ……だが、それも近頃では随分解消されている。

何度も危険な所を助けられたし、ただ馴れてきたというのもその理由の一つ。

それに同じパーティーの仲間として……彼の男気に惹かれ始めたようである。

もともとメアリーの初恋相手はこのベルモット。

まだ幼かった日、パルに連れられ街の美術館に見学に言った事がある。その時、様々な絵画の中にあっただのがこのベルモット・カシ

スの肖像画だった。

女の子はたちまち……若く、気高く、気品溢れるその姿に一目惚れ。

以来、彼女の心は彼以外の男を受け付けられないほどになる。

しかしながらお互い成長し、彼の変わり果てた姿を見るコブリンにおよんで、百年の恋も冷めた……はずだった。

でも、近頃彼女の心は少しときめいているのだ。

今度の恋は姿形に憧れた子供の頃の半端な恋ではない。深く静かに始まった、本物の恋。

メアリーは自分の心にまだ気づいていない。それはまだ始まったばかりなのだ。

そんなベルモットに対し、少女は頬を染め高揚した声で尋ねた。

「つまり今度の仕事は魔法使いが必要な相手ということね。私たちの剣が通じないって事は……敵は空を飛ぶか、もしくは巨大生物？」

若いながら鋭い指摘だとベルモットは感心する。まさにその通りだ。

伝説の剣士のなれはては、醜い顎を上下させることで同意する。

「さつき、道端で拾ったんだ」

ベルモットが右手にあるものをメアリーに差し出す。

人の顔ほどもある固い板だ。だが木製ではない。

どちらかと言えばそれは魚の鱗うろこに近いもの。

メアリーはぎょつとしてベルモットを見た。思い当たるふしはある。しかしまさかという気持ち。

少女は勇気を絞り出し、伝説の剣士に問うた。

「ひょっとしてこねって……ドラゴン？」

4 .

「ド、ドラゴン？」

メアリーの言葉にその場にいたすべての人間が驚きの声をあげた。当然ながらゴブリン姿のベルモット・カシスは除かれる。唯一冷静なこの伝説の剣士は穏やかに頷くところ語り始めた。

「タワリツシの村から音信が途絶えたのは6ヶ月前。完全なる自治区とは言え、毎年二回必ず王宮に報告を入れていたのでな。不信に思われた陛下はタワリツシに騎士達を派遣したのだ。出向いたのは10人ほど。ちょうど今から2ヶ月前だ。そしてこちら音信不通」

「いずれも城下で名の聞こえた騎士ばかり。これは何かあったに違いないと……そこで我らが国王ピコン・グレナデン三世陛下はこの事態を打破すべく、評判の冒険者つまりお嬢に白羽の矢をたてたのです」

ベルモットの話を引き継いだパルの言葉を聞くと、レズっ娘シャリーが嬉しそうに叫ぶ。

「キヤー、キヤー、メアリー様。さすがですう、ステキですう、憧れですう！」

今風に言えばジャニオタ、いやどちらかというと韓流スターに奇

声を上げるおばさま方に近い反応。

だがこのシャーリーの黄色い声援にも、当のメアリーはギロリと鋭い一瞥いちげつをくれただけ。

深層水より冷たい女剣士の態度に、シャーリーはさすがごと引き下がるしかなかった。

その代わりとばかりに、会話に加わってきたのは若き黒魔法使い。

「うーん、確かにここはドラゴンの生息地として知られていた土地のようですね。古代の書物に、この地でのドラゴンがもたらした災厄の数々が記載されていたのを思い出しました。しかし……ここ500年ほどは目撃者すらいらないのも事実。果たして本当にドラゴンなどいるのかどうか」

流石に賢者。酔ってさえいなければこの男はかなり役に立つ。

そんなハーヴェイの言葉を肯定するようにパルも続けた。

「確かにのう。わしもひい爺ちゃんの昔話で聞いた事があるくらいじゃ。ただの神話だと思っておった」

パーティーで最も年長であり知恵者でもある自称盗賊のパル。彼の言葉は重みがある。

メアリーをはじめとして皆が力強く頷いた。

要するにドラゴンみたいな神話世界の生き物がいることなど半信半疑なのである。

「まあ、ドラゴンじゃないならそれにこしたことはない。俺とて剣が通じない化け物は相手にしたくないしな」

苦笑しながらそう言うと、ベルモットはメアリーに渡した巨大な鱗をもう一度見つめる。

太陽に反射するそれはとても美しく、見る者を魅了する雰囲気があった。

以前父親の書齋にあった家宝、ドラゴンスケイル龍鱗と呼ばれていたものに限りにく似ているなどベルモットは感じていた。

はたして、本物が否か……

その時、彼の深い思索を打ち破るかのような若い女の叫び声がある。

「あつ、あれつてもしかしてタワリツシの村じゃないですかあ、メアリー様？」

いつの間にか先頭に立つて歩いていたシャーリーが指差す。その先には確かに小さな村落があった。

ついに目的の地へとたどり着いたのだ。ベルモットは腹をくくつた。

パーティーのメンバーを見回すとニヤリと笑いながら言った。

「ふむ、百聞は一見に如かずだな。さあ、行こうではないか。そしてこの目で見てみよう。本当にドラゴンなどがいるのかどうかをな」

5 .

村の入り口につくと、そこは見るも無惨に荒らされていた。

レンガ造りの門はもろくも崩れ、家々は焼かれ壊されている。

村を突っ切る一番広い道の真ん中には、鳥の足跡のような窪みが幾つもできていた。

その大きさはゆうに一メートルを超える。

そして人間をはじめ生きているものは何も無い。まさに廃墟であった。

「あゝあ、こりゃあ酔いもさめちやいますねえ」

軽口だが……その表情は決して笑ってはいないハーヴェイ・ウォールバンガーがぼやく。

「どつやら間違はなくドラゴンのようですねえ。こここの有り様が、文献にあるドラゴンに襲われた街の記録に瓜二つの惨状ですよ」

賢者たる魔法使いにはつきり断言されると、メアリーたち一行の心はうち沈んだ。

まさか生きてあの幻の怪物にお目にかかるとは……

その時、寡黙な表情で考え込んでいたパルがベルモットに尋ねる。

「ベルモット様、村の者は全滅でしょうか？」

伝説の剣士は先ほどから倒壊した家々を調べていた。

小さなゴブリンの体であるが、その能力は人間時代のものを引き継いでいるようだ。

軽々と瓦礫を撤去してみせる。

「ふむ……変だな」

焼け焦げた太い柱を後ろにぶん投げるとゴブリンが呟いた。

そのささやき声を、メアリーは聞きのがさない。

彼女こそこのパーティーのリーダーなのだ。国王から依頼された仕事を立派に果たすべく、彼女なりに真剣である。

「変？ いったい何が変だというの、ベルモット？」

「ああ、実はな……この村はおかしな所だらけなんだ」

メアリーの問いかけにベルモットは説明を始めた。

「いいかいメアリー。まず変なのは瓦礫の下にまるで生活感が無いことだ。つまり食べ物や飲み物がまるで無いってこと。ドラゴンに襲われながら悠長に食物なんか持って避難できんだらう？ これでは……無人の村を襲ったみたいだ」

「あつ、なるほど。それも変ねえ」

感心したようにメアリーが相づちを打つ。

「でもメアリー様。ドラゴンの接近をいち早く察知した村人が一斉に避難したあと、ドラゴンが無人の村を襲ったのかもしれないわ」

シャーリーがご機嫌を取るかのようにメアリーに媚びつつ発言する。

だが、彼女の努力も水泡に帰す。

シカトされた訳ではない。むしろメアリーは変態レズ娘にしてはいい意見だと感じていたのだ。

ではなぜ？

それはメアリーが反応する前に頭の良い酔っ払いが真っ向否定したからである。

「バカだなあシャーリー。ドラゴンは肉食だよ？ 誰もいない無人の村なんか襲うもんか。あの怪物の目も鼻もついでに頭の良さも……人間なんかはるかに凌駕するらしいからね。下手な小細工は通じない」

なるほど納得。メアリーはあらためて賞賛の視線をハーヴェイに送る。

一方、せっかくメアリーと会話できるチャンスだったのにあっさり潰されたシャーリーは怒りのオーラに満たされている。

（バカ、あなたに聞いた訳じゃないわよ。この万年二日酔いへっばこ黒魔術師が！）

久しぶりに呪いの呪文でもかけてやろうかしら、と危ない思いを女神官が抱き始めた時だった。

ベルモット・カシスが次なる疑問点を投げかける。

「今もハーヴェイが指摘してくれたように……俺もそこが気になったんだ。つまりドラゴンは肉食だったこと。文献によれば、ここトニック山麓に住まうドラゴンは、たった一日で100人の人間を食らった事もあるそうだ」

「100人？ 凄……ならば、この小さな村が全滅したのもうなずけるわね」

二本のレイピアを闊達自在に振り回し、数々の強敵と戦ってきたメアリーだったが……ベルモットの語るドラゴンのあまりの凄まじさには身震いを覚えた。

はたして人間などが勝てる相手なのか？

自信は限りなくゼロに近い。

すると……そんなメアリーの肩に、ずしりと重い何かが触れた。それは毛むくじやらで無骨な手のひらである。

悪い魔女に呪いをかけられゴ布林姿にされてしまったベルモットのもの。

まるで彼女の心の動揺を見透かしたかのようなタイミングで、彼

は元気づけるように手に力を込めた。

肩ごしから伝わる温もりがメアリーを落ち着かせていく……

「大丈夫だメアリー。文献によれば、過去に幾人もの勇者がドラゴンに挑み打ち倒している。例えば、我らが王の家系をたどってみよ。龍殺し（ドラゴンバスター）の勇者を何人も輩出しているのだ。決して人間が及ばぬ相手ではない！」

「……うん」

幾分だが、慰められたとメアリーは感じた。心の中で力強くうなずく。

確かにそうだ。人間は強い！

だからこそこの地上にはドラゴンではなく、人間が支配者として君臨しているのではないか。

震えの止まったメアリーを、さらに安心させるかのようにベルモット・カシスが話を続ける。

「それにな、俺が言いたいのドラゴンの強さではなく……村を襲ったのはドラゴンではないんじゃないかという事なんだ」

「えっ、ドラゴンじゃない？」

これには全員が驚かされる。だって彼らがいる荒れ果てた村落には明らかに巨大生物が暴れた痕跡が残されているからだ。

それに……村人も王宮から派遣された騎士たちも誰一人いない。ドラゴンでなければいつたい誰が彼らを連れ去ったというのか？

「だって考えても見るよ」

不振な目を向けるパーティーにベルモットは語る。

「50人も人間がドラゴンに食われたなら、その痕跡くらいはあって然るべきだ。それなのにここには骨一本、いや血痕一つ残されていない。これはおかしいだろ？」

「確かに……じゃあ一体どういうことなの？」

訳が分からないといった様子でメアリーが叫ぶ。

答えは一つしかないとベルモットは答えた。

「極めてうまくできているが……これらはすべて人の手によるものだ」

「まさか……誰が一体何のために？」

メアリーの言葉に今度はお目付役のラルが答えた。

「もしかしたら……王宮に関係する者どもの仕業やもしれませぬ。つまり、お嬢に対する嫌がらせですな」

「はあ、王宮関係者？ 貴族や僧侶や騎士たちの仕業ってこと？ それこそ何だよ」

メアリーは不思議であった。一般市民として育てられた彼女には、王宮など雲の上の存在。

母親は宮殿で侍女として働いていたと聞いていたが……それ以外の関係はまるでない。それなのに何故、貴族や僧侶、騎士たちが自分などに嫌がらせをするのか？

「そろそろ……潮時だろう、パル」

ベルモットが呟いた。

「ですかな」

パルも寂しそうに呟く。

「皆もよいか？」

今度は瓦礫の上にだらしなく座りこみ、持っていたウイスキーのボトルをにやけながら取り出していたアル中黒魔術師ハーヴェイと、メアリーのそばで彼女の匂いをこっそり嗅いでいけない妄想をかき立てている変態女神官シャーリーに真面目な顔で向かい合う。

二人は突然向けられた敵かなパルの言葉に、立ち上がった。そして……

「お望みのままに」

「構いませんわ」

それぞれ言葉は違えど礼儀正しく返答する。

いったい何が始まるのだろうか？

メアリーはドキドキしながら成り行きを見守る。
すると……

パルがおもむろに立ち上がり敵かにこう宣言したのだ。

「貴方こそ……メアリー・グレナデン王女殿下なのです！」

「わ、私が……王女？」

気がつけばメアリーの周りでは、パーティーのメンバー全員がか
しずいていた。あの大貴族の三男坊ベルモット・カシスまでもが膝
をついている。

この国でカシスの姓を戴く者がその身を屈める相手は一人しかい
ない。国王ピコン・グレナデン三世のみ。

それが今……ベルモットの頭は確かにメアリーに向かって垂れ下
がっているのだ。

ゴ布林姿ゆえに忘れがちだったが、彼は本来なら気軽に話すこ
とすら叶わぬ高貴な男。改めて考えると不思議であった。

メアリーはこのあまりにも急すぎる展開にただあたふたするのみ
である。

「ね、ねえ……冗談だよな？ わ、私が王女様だなんて、そんなわ
けないもん」

「いいえ、あなた様は間違いなく陛下の娘、内親王殿下にあらせら
れます」

パニクる少女に自称盗賊のパールが穏やかに言った。

「戸惑うのも無理からぬことですが、どうか落ち着いてお聞きくだ
さい。あなた様がお生まれになった時……ピコン・グレナデン陛下
はことのほかお喜びでございました。あなた様の母、マリア殿と陛
下は本当に愛し合っておいでだったのです。されど当時の王宮は…
…生まれたばかりのあなた様とその母マリア殿にとっては大変危険

な場所でありました」

「……………危険？」

「そう、危険だったのです。あなた様の誕生を喜ばぬ勢力が王宮には確かにございました。当時……………陛下にお子は一人しかいません。それも病弱で明日をも知れぬ命。陛下の次の王座を狙う悪い奴らにはなんとも都合の良い状況だったのです。それなのに……………メアリー様、あなたが生まれた。女の子とは言え元気で健やかにお育ちになるあなた様を、奴らは脅威に思うようになったのです。反逆者どもが極秘に暗殺を企てているとの情報もございました。そこで……………陛下は、あなた様とマリア様の身の安全のため、身分を隠し市井で普通に暮らすよう取り計らわれたのです」

パルの説明にメアリーはため息で応じた。

そうだったのか……………まったく驚天動地の展開である。

少女は口を閉ざし昔の記憶を辿る。

そう言えば母さん、お父さんのことあまり話してくれなかったな。けど……………いまだに信じられない。

「本当なんですよメアリー様」

浮かぬ顔のメアリーにシャーリーが言った。

「そうでなきゃ……………パルさんみたいな高級官僚が、たかが一冒険者のメアリー様にお仕えするはずありませんわ」

少女の内心の混乱を見透かしたかのように女神官が微笑む。いつもの変態ぶりは影を潜め、かしまった仕草。

「えっ、パルが？」

「パル殿は副宰相なんです。王宮内でも影響力のあるお方ですし、陛下の人望厚い股肱の臣。結構、有名人ですよ」

今度は黒魔術師ハーヴェイ・ウォールバンガーが顔をあげた。メアリーの目をしっかりと見つめるその姿はいかにも賢者という風体。いつもの酔っ払った彼からは想像つかぬほどの変わりようだ。

「本当……なのね、パル？」

「はい、お嬢。いや、メアリー殿下」

不思議だった。

ついさっきまで……ただの町娘だった自分。それが今や王女様だ。世の中、分からないことだらけ。

まあ、ふとつちよのパルが盗賊じゃないって事は確信してたけど……

「要するに、私が王様の隠し子だったことは理解したわ。そして王宮にいる悪い連中に嫌われていることも。けど……何でよ？ 何でこのタワリツシの村を襲ったの？ そこがいまいちぴんとこないわね。それもご丁寧にドラゴンのふりまでして」

いかにも正論である。

その問いには大貴族の三男坊ベルモットが答えた。

「実はなメアリー、陛下はそろそろお前さんを王宮に招くことに決めたそうなんだ。若く、美しく、そして誰よりも強い。女冒険者としての高い名声を得た君を、後継ぎとして公表しても誰も反対しま

いと判断したのだろう」

「なるほどね……ふん、いい迷惑だわ」

メアリーは本気で迷惑そうに呟いた。

実際、彼女は王宮などに興味ないし、どちらかというの大嫌いな方。

いまさら国王に父親面されるのもなんかムカつく。

「だが、反対派は君の王宮入りに我慢がならなかったらしい。次に起こる事件の解決を待って、陛下が君を王の娘だと発表するつもりだと知った奴らが……このタワリツシの村に目をつけたんだろう」

ベルモットの言葉に、珍しくあまり酔っ払ってない黒魔術師が同調する。

「なるほど考えましたねえ。タワリツシに来てみたものの、村人はドラゴンに襲われてだれもいない。そこで、さすが引き返すしかなかったメアリー様を王宮をはじめ街中でも侮辱するわけですね。おめおめ逃げ帰った臆病者と。そうして王女の名声は地に落ちる」

「ふむ、誰も傷つけずメアリー様だけを狙った巧妙な手口だ。この手の込んだ陰謀はやはり……あの方の仕業ですかね？」

パルの言葉にベルモットが悲しそうに眉をひそめた。

あまりふれて欲しくなかった話題であつたらしい。

だが、宮廷の権力闘争に巻き込まれた当事者たるメアリーは、聞かずにはおられなかった。

「ちょっと、ちょっと二人とも……この事件の犯人を知っているの

ね！」

その問いかけに、パルはなんともばつが悪そうな曖昧な表情を作り何も答えない。

一方……ベルモットは軽く頷くことであっさりと肯定した。

メアリーは待った。

この見かけはともかく誠実なゴブリンの口から真実が語られるのを。

すると、少しの間を置きついに大貴族の三男坊は語ってくれたのだ。

「メアリー、お前さんの宮廷入りを反対しているのは、この国のナンバー2の人物だよ。つまりこの国の宰相閣下という事だな。凄い男だせ、100年に一人の天才と謳われているくらいだ。それが……キシリツシュ・カシス。俺の一番上の兄貴でもある」

7 .

「お、お兄さん？」

甲高い声が無人となったタワリツシの村に響いた。

意外も意外、そんな身近な人間の親族に下手人がいるなんて……

「ど、どういうことなの？」

メアリーは不安げにベルモットを見た。

そう言えば噂に聞いた事がある。大貴族のカシス家には四人の兄弟がいて、皆仲がよいと……

ひょっとしてベルモットも？

「安心しろ。俺はお前さんの見方だよ。実際、陛下と俺は年は離れているが友達付き合いさせてもらってるくらいだ」

「そ、そうなんだ」

ホツとした。メアリーにとって今やベルモットはかけがいのない友達である。

いや……最近はその以上の存在になりつつもあるのだ。

「だがな、許せよメアリー。俺以外の兄弟は皆、どうやら反対派になっっているようなんだ」

すまんと、ベルモットが申し訳無さそうに頭を下げる。

その獣のような顔からは分かりにくいがおそらく困惑した表情なのだろう。

それにしてもベルモットの兄弟が反対派だなんて……あと二人の兄弟とはいったいどんな人物なんだろう？

「ベルモット様の姉上様はあたしも良く知ってますわ。つまりミリオナーゼ・カシス様は、あたしの神殿でも一番偉い大神官を務めますから」

頼まれもしないのにシャーリーが口を挟む。すると魔法使いも負けじと加わる。

「もうお一方はビギンズ・カシス様ですよ。我らが魔術師たちの長、大賢者職についておられます。まあ、僕の上司ですね……相当の方の」

「へ、へえそうなんだ」

メアリーはとりあえず二人に礼を言う。だが、正直あまり聞きたくない情報だった。残りの二人も超がつくVIPだ。

知らないままの方が幸せだったかもしれない。

「この国の政治、宗教を牛耳るお三方ですな。彼らに逆らってこの国で生きていける確率は……限りなく低い」

言わずもがなの発言でさらにメアリーを追い込んだのは、これまで親代わりに世話してくれたパルである。

じゃあ、どうすればいいのよ？

メアリーは怒鳴り散らしたい気持ちを押さえ込んだ。

「と、とにかく今は王宮の事とかは考えないようにしましょう。大事なのは村人の事よ！ 彼らはどうなったの？ まさかベルモットのお兄さんが殺しちゃったって事は無いわよね」

メアリーの言葉に一同が思わず唖る。

果たして6ヶ月も前から行方知れずになった村人がはたして生きていたのだろうか？

「おそらくだが………生きているだろう。兄貴は自国の民を無闇に殺すほど悪じゃない。もともとタワリツシの村人は自給自足の生活。大金をつかませて半年間山にこもってくれと頼めば事足りるだろう」

「ふーん、そうかあ………あつ！ そう言えばさ、あたし達より先に騎士団が派遣されてなかったっけ？ 彼らはどうしたのかな」

そんなレズ娘の疑問にパルは語った。

「たしか、探索の命を受けて出発した10人の騎士は皆、宰相閣下の部下たちであったな。今頃、キシリツシユ様の命令で我らの動向を見張っておるやもしれぬ」

パルがそう推測したその時である。ズバリ推理が命中していた事が明らかになった。

というのも……

「わははは、ドラゴンが襲撃した村の残骸を見ても逃げ出さぬとは天晴れな奴らよ！ この上は我ら暁の騎士団がお前たちの相手をしてくれる。痛い目にあいたくなければさっさと逃げ出すが良い！」

8 .

暁の騎士団は完全武装の10人からなる小隊である。

王国の正規軍らしく皆規律正しく儀礼を重んじる男たちであった。そしてそれが命とりとなる。

まずハーヴェイが得意の黒魔法を唱えた。火炎の呪文。

横二列で迫っていた騎士団がたちまち蜘蛛の子を散らしたようにバラバラになる。

そこに変態女神官シャーリーの白魔法が炸裂した。

昏睡の呪文だ。

バタバタと三人ほどの騎士が眠りに落ちる。その顔は皆苦悶に満ちている。

どうやら彼女は眠らせただけでなく最悪の夢を騎士達に見せたよ
うだ。

そして残りの騎士はメアリーとベルモットが制圧した。

二刀のレイピアを華麗にさばく少女は舞を舞うかのように打ち倒していく。

一方、悪い魔女に呪いをかけられゴブリンになってしまった男の方は、やや優雅さには欠ける戦いを見せた。

背丈ほどもある大剣を縦横無尽に振るい、騎士達の兜に叩きつける。

ベルモットが一振りするたび気絶した騎士が一人また一人と増えていく。

「やれやれ、僕たちの魔法なんか……お二人には必要ありませんでしたねえ」

騎士達が出てきてものの10分も経たずに全てが終わった。

黒魔法使いハーヴェイが本気とも冗談ともつかない言葉を発する。

「お二人ならドラゴンあいてでも勝っちゃうんじゃないですか？」

「ふん、まさかな」

ベルモットが自嘲気味に首を振る。

こんな騎士10人程度など……ドラゴンの炎のひと吹きで消し炭になるだろう。

本当に相手が人間で良かったと、ベルモットはつくづく思っていた。

「さてと……じゃあ村人を探しましょう。それで任務は完了よ」

メアリーが元気よく言った。

得意の剣も振るえたし戦いにも完勝した。行方知れずの村人につ

いてもメドがたっている。はっきり言って機嫌は最高。
だが、その時……

「あつ、メアリー様！ あれって村人じゃないですか？」

レズ娘が指差す方向を見る冒険者パーティーの一同。

彼女が言う通りだ。山から駆け下りてくる50人ほどの人影が見えた。

騎士たちが出ていったので、仕事も終わりと勘違いして出てきたのかな？ メアリーがそう考えた次の瞬間！

「う、嘘でしょう？」

走る村人の背後にある小山のような存在にメアリーは気がついたのだ。

蜥蜴のような風貌。背中には蝙蝠みたいな羽がはえ、その大きな口からはチヨロチヨロと炎が垣間見える。

間違いない。あれは……あれこそが……

「ドラゴン？」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9386f/>

伝説の剣士じゃない！ ～ドラゴンの鱗（うろこ）～

2011年1月16日05時43分発行